

安芸津の地域構造について (フィールド調査からの考察)

樋渡 彩^{*1}, 陣内 秀信^{*2}, 上田 健一朗^{*3}

About the Local Structure of Akitsu. (Observations from Fieldwork)

Aya HIWATASHI^{*1}, Hidenobu JINNAI^{*2} and Kenichiro UEDA^{*3}

This paper is part of the Town & Gown Office COMMON Project. It examines the intrinsic value of Akitsu from various perspectives, including its history, culture, industry, information, and memories.

In fiscal year 2025, we conducted mapping work and multiple field surveys to uncover potential tourism resources from a historical perspective. Through these field surveys, we discovered that Akitsu is formed by a rich territorio encompassing the city (commercial areas, etc.), the sea (fishing, salt production, etc., including islands and coastal waters), and the land (agriculture, etc., inland areas).

Keywords: Setouchi, territorio, Akitsu, Mitsu, Kazyahaya, Kidani, Fisheries, Agriculture, Commerce, Salt Production, Industry

1. はじめに

東広島市が大学と提携し、社会課題の解決を目指すことを目的とした Town & Gown Office COMMON プロジェクトの一環で、2024 年度から安芸津のプロジェクトが立ち上がった。安芸津の課題としては老朽化した港の整備が挙げられるが、表面的に港を整備するだけでなく、歴史から安芸津の価値を掘り起こし、安芸津全体の活性化につなげたまちづくりを考えていきたいということで、2023 年 9 月に東広島市から我が都市歴史研究室に依頼があった。

そこで、安芸津のプロジェクトでは、安芸津の沿岸部だけでなく内陸部も含め、歴史、文化、産業、情報、記憶などさまざまな視点から本質的な価値を検証していこうと考えている (図 1)。さらに竹原、忠海、尾道、呉、広島などの安芸津を中心とした周辺地域や、安芸津の対岸に位置する大崎上島、大崎下島、大三島などの芸予諸島を含む瀬戸内海に浮かぶ島々とのつながりを捉え、安芸津を拠点にした瀬戸内に存在してきた様々なテリトリー

リオの構造を描き出す試みである。



図 1 瀬戸内海における安芸津の位置 作製：樋渡彩

2024 年度は、安芸津の中心部である三津について資料収集をした。地図を少しずつ読み込み、整理し、その研究成果の一部を日本建築学会、特定非営利活動法人 瀬戸内海研究会が主催する瀬戸内海研究フォーラム、本学主催の研究公開フォーラム、EXPO2025 大阪・関西万博などで発表した。

原稿受付 2026 年 3 月 11 日

^{*1} 近畿大学工学部 建築学科講師, (〒739-2116 東広島市高屋うめの辺 1 番)

E-mail hiwatashi@hiro.kindai.ac.jp

^{*2} 法政大学名誉教授, 江戸東京研究センター特任教授

^{*3} 近畿大学大学院システム工学研究科 修士 2 年

2025年度は、歴史的視点から見た観光資源になりうるものを発掘すべく、地図作業と数回にわたるフィールド調査（FW）を行った。本稿は10月4～6日に開催したFWについて報告する。

2. 10月4～6日に開催されたFWの概要

FWには、陣内、樋渡のほか、陣内研究室出身で、現在、持続可能な関係人口、交流人口増のまちづくりについて企業視点で研究し、自治体と連携事業に取り組んでいる八木邦果氏（株式会社ミサワホーム総合研究所・フューチャーデザインセンター・市場企画室室長）と、いつも我々の報告書の編集に協力いただいている岩倉智美氏（編集者・ライター・Path主宰）も参加した。安芸津の外部の方が参加することによって、地元の人が当たり前と思っているような風景がいかに価値あるものかが具体的に見出された。

安芸津からは東広島市安芸津支所所属で、プロジェクトの最初から参加し、安芸津に関する助言を度々していただいている尾首隆博氏も参加していただき、FWの随所で地元についてレクチャーいただいた。

スケジュールは下記の通りである。

10月4日午後：原田氏によるレクチャー、三津のFW

10月5日午前：八木灘のFW

10月5日午後：風早のFW

10月6日終日：木谷のFW

3. 安芸津町の沿革

安芸津町は、広島県東広島市の瀬戸内海に面する港町である。「安芸国の良い津（港）」という意味が込められており、古くから良好な港として知られている。1825年の芸藩通志に記載されている賀茂郡三津村、賀茂郡風早村、賀茂郡大田村、賀茂郡小松原村、豊田郡木谷村が現在の東広島市安芸津町を形成している（図2）。安芸津町の沿革は次のとおりである。

1889年 賀茂郡三津村が発足

1889年 賀茂郡風早村、賀茂郡大田村、賀茂郡小松原村が合併して早田原村が発足

1889年 豊田郡木谷村が発足

1893年 賀茂郡三津村が賀茂郡三津町になる

1943年 賀茂郡三津町、賀茂郡早田原村、豊田郡木谷村が合併し、賀茂郡安芸津町になる

1956年 賀茂郡安芸津町は、豊田郡に変更

2005年 豊田郡安芸津町は、東広島市に編入



図2 賀茂郡, 1825年

国立公文書館「芸藩通志」に樋渡彩が着色・追記

4. 三津のFW

10月4日は、まず、三津出身でボランティアガイドの会の会長を務めた原田欣二氏から三津についてレクチャーしていただいた。原田氏が93年もの間見てきた三津について、地図には現れない情報をたっぷり教えていただいた。雨も小降りになったため、レクチャー後、実際に原田氏の案内のもと三津の町を歩いた（図3）。明治時代の地形図、大正時代の職業別住所入名細図、1970年代の住宅地図を片手に原田氏の体験や情報をうかがいながら、三津のかつての姿を想像した。



図3 2025年10月4日、原田氏と三津のFW

撮影：元岡美穂

4.1 三津町の変遷

古代、中世を通じて三津では、停泊や、浦々の沖を通過したと思われる旅人がいたとされる。竹原小早川氏は室町時代三津港の機能を重視した。三津船番匠（船大工）と呼ぶ直属の船大工集団を扶養し、海上発展への前線基地として竹原小早川氏の沿岸部・島嶼部の進出の役割を果たした。これに加えて大内氏の安芸国の拠点東西条の東南海上への出口にもあたっていた^{注1}。三津は安芸国府が西条にあった時代の外港だった説もある^{注2}。

本格的な酒造については、三津の菅家が1578年の創業を伝えており、中世末期には既に始まっていた^{注3}。実際、酒造業で栄えたのは明治時代で、江戸時代には今ほど街が広がっていなかった。

1649年、広島藩の浦辺御蔵所として三津が指定された。三津は5か所（尾道、忠海、三原、竹原、三津）のうちの1か所であった^{注4}。設置された御蔵所に、賀茂郡や豊田郡内の村々で収穫された年貢米が集められ、さらに船で瀬戸内海を経て、大坂に置かれた広島藩の蔵屋敷に廻送された。

三津は良港として栄え、御蔵所が設置されたのも良港としての評価もあったとされる。米の運送以外にも担っていた^{注5}。

1871年、酒造業は規制から解放され、免許制度により自由に生産・販売できるようになった。三津は瀬戸内海に面した立地を利用し、近代になって県外に酒の販路を求めた^{注6}。杜氏が育ち、日清戦争と日露戦争で酒が飛ぶように売れこのお金で土地を買った酒造業者は多いとされる^{注7}。

酒造業が栄えていたことを伝える資料としては、1926（大正15）年の「大日本職業別住所入明細図」がある。この地図から酒造りをしていたことがわかる「醸造所」や酒を保管するために必要不可欠な「樽製造所」も確認することができる。また、置屋、料理屋、髪結屋があり、港町として多くの人が滞在する土地柄が表れている。おそらく、三津の旅館が置屋の芸妓さんと呼び、三津で仕込まれた酒を振舞っていただろう。当時は商業中心の町で活気づいていたことがこの図から想像できる。

FWでは金井旅館など「大日本職業別住所入明細図」に載っている場所が現在も同じ場所に存続していることを確認した（図4、5）。



図4 金井旅館 撮影：樋渡彩



図5 建物用途の分類

1926年、大日本職業別住所入明細図に田中碧衣が着色

1943年、三井造船所の進出を機に合併し、安芸津町となり行政の形も変化した。三井造船の進出で一大工業地帯が出現する計画だったが、戦時中のため財政、工程、資材調達、人員確保ができなかったとされる。広大な埋め立てが行われた。1943年、安芸津町は都市計画施工町に指定され、街路は6m以上とされた。幹線道路や、三津駅からの引き込み線の工事が行われ、町の形が変わった^{注8}。

4.2 住宅地図から見た三津の移り変わり

三津の歴史的町並みの変化は住宅地図から次のような変化があることがわかった（図6、表1）。1971年には商店が並び、旅館の存在も確認できた。一方、1982年から2020年では更地や空き家が増えており、店舗が減少傾向である。また、2005年から2020年の大きな変化として、店舗兼住宅が住宅になったことが明らかとなった。商業中心の町だったが店舗が減り住宅の多い町に変容した。

このように三津ではかつて港町として栄えた都市構造を引き継ぎ、商店街が形成されていたことがわかった。現在は店舗から住宅や駐車場に置き換わってはいるが、今も人々を寄せ付ける求心的な役割を担っている。



図6 正念寺前の通り
1982年の土地利用・建物用途図に番号をつけたもの。

作製：上田健一郎

番号	1926	1971	1982	2005	2020
1	正念寺	喫茶店オアシス	喫茶オアシス	軽食喫茶オアシス	喫茶店オアシス
2	正念寺	ゆたか〇〇店	ヤマサキショップとよぐち	山中カイトプラザ ティック曉	住宅
3	正念寺	セビロ屋 洋服	セビロ屋 洋服	セビロ屋	空き家
正念寺の門	正念寺	正念寺の門	正念寺の門	正念寺の門	正念寺の門
4		タツミ靴店	タツミ靴店	不明	更地
5		大本肉店	大本肉店	不明	更地
6		女性専科ひまわり	女性専科ひまわり	不明	更地
7		横崎薬店	横崎薬店	更地	更地
8		豊口〇〇〇 ミシン商店	豊口〇〇〇 ミシン商店	正念寺駐車場	更地
9		安芸津食糧	安芸津食糧	正念寺駐車場	更地
10	原田雑貨店	原田酒造	原田酒造	原田酒造	更地
11	川上飲食店	芸陽信用金庫	芸陽信用金庫本店	芸信用金庫安芸津支店	更地
胡神社	胡神社	胡神社	胡神社	胡神社	胡神社
12	石川材木店	石川・宮田植木店	宮田植木店	不明	更地
13		住宅	住宅	住宅	住宅
14	本田米店	飯井タンス店	飯井タンス店	飯井タンス店	飯井タンス店
15		飯井醤油店	飯井タンス店	飯井タンス店	飯井タンス店
16	米穀肥料会社	ナショナルパチンコホール	パチンコナショナルホール	不明	住宅
17	内藤米穀雑店	大成精打店	パチンコナショナルホール	不明	住宅
18	内藤米穀雑店	ナショナルパチンコホール自転車置き場	大成	わた打替 大成伸三	大成
19		碓井医院	碓井医院	碓井医院内科 碓井元夫	碓井元夫
20		住宅	住宅	住宅	香川
21	香川医院	香川内科医院	タイエイ美術	香川信子	香川
22	川上試力店	益井理容	益井理容	碓井良人	不明
23	郵便局	アキツストア	車庫	正岡写真車庫	不明
24	今田自転車	納（住宅）	納（住宅）	納五郎（住宅）	不明
25	港旅館	コンパ？食堂	食事処えびす	更地	住宅
26		倉庫	岡野鮮魚店	岡野鮮魚店	住宅
27	吉村材木店	山中魚店	伊東（住宅）	伊東歯科 伊藤了自	伊東歯科クリニック
28		伊東歯科	伊東歯科	伊東歯科駐車場	駐車場
29	吉村醤油場	佐武金物	佐武金物	不明	不明
30		佐竹電工	空き家	更地	駐車場
31		大上食品店	大上食品	更地	月極駐車場
32		大洲洋品店	大洲洋品	更地	月極駐車場
33	井上洋服店	井上食品店	井上食品店	更地	月極駐車場
34	松乃家料理店	住宅	空き家	更地	月極駐車場
35	小倉雑貨店	おおした建具	おおした玩具店	大下玩具店	駐車場
36		黒田文陽堂	黒田文陽堂	手芸品みくらや	不明
37		住宅	みくらや毛糸	更地	更地
38	大野水菓子店	岡谷時計店	岡谷時計	更地	更地
39		倉庫	車庫	2F住宅・1F車庫	不明
40	山下呉服店	山本呉服店	山本呉服店	山本呉服店	山本呉服店
41	五島呼岩堂菓子	月岡菓子店	五島呼岩堂	五島呼岩堂 月岡純司	空き家
42	本田和洋酒青乾仏商	進物のセトモノ	進物の早田	進物の早田	進物の早田
43	福井和洋酒雑貨	福井百貨	福井百貨	福井善之	三津福井館
44		正岡写真	正岡写真	正岡写真 正岡康晴	駐車場
45	井口玩具店	荒谷楽器店	荒谷楽器店	駐車場	駐車場
46		ウエモト電機店	不明	駐車場	駐車場
47	金栄丸和洋酒雑貨店	金栄丸本店	金栄丸本店	駐車場	駐車場
48	川本肉店	川本肉店	川本肉店	川本政春	川本政春
49	坂田銃工所	住宅	住宅	住宅	空き家
50	今田履物店	安芸津 衣ベン	住宅	住宅	住宅
51	今田履物店	益吉ハキモノ	益吉ハキモノ	駐車場	駐車場

表1 正念寺前の通り
における建物の変化
番号は図6に対応
作成：上田健一郎

5. 八木灘のFW

10月5日午前は、三津の港から八木灘を船で周遊した。船は「遊漁船 晴光丸」で、普段は釣り船としてこの辺りの海を周っている船である。学生たちが事前に調べた島をどうまわるか打ち合わせた後、いざ出発。この日は都市歴史研究室 OG の田中碧衣氏も愛知から駆けつけてくれた。田中氏は卒業論文「酒造業で形成されたテリトリーオに関する研究——竹原・安芸津・西条を事例として」で安芸津における酒蔵業のテリトリーオを描き、日本建築学会優秀卒業論文賞受賞し、2024 年からは安芸津のプロジェクトを中心になって進めてきた。久しぶりの調査だったが、一眼レフカメラを樋渡から渡されると、スイッチが入ったのか、田中氏は撮影モードになった。集落構造や神社の位置がわかるような的確な写真を撮影し、我々の調査に大いに貢献してくれた。

安芸津沿岸および八木灘の島々を船から見ると、現在無人島でも立派な神社があることがわかり、船が激しく往来していた当時の様子を垣間見ることが出来た。



図 7 柏島にある柏島神社 撮影：田中碧衣



図 8 精錬所のある契島 撮影：樋渡彩

6. 風早のFW

10月5日午後は、三津の西隣である風早を周った。ここでは地元の尾首隆博氏（東広島市安芸津支所所属）が案内してくださった。

万葉集に「風早の浦」が登場しているように古くから良好な港として知られている。その地の利を生かして、瀬戸内海の経由地として発展してきた。

元行寺から祝詞山八幡神社の裏道は神秘的な空間だった。また、蛇行する河川が特徴的な風景を作りだしていた。



図 9 2025 年 10 月 5 日 風早の調査
撮影：元岡美穂



図 10 神秘的な神社の裏道
撮影：樋上颯人

6.1 地形と結びついて形成された蛇行する小川と水路

風早には小川のような幅の狭い河川や水路が多く流れ、独特な風景や景観を作り出している。実際に歩いてみると、蛇行している小川や水路によく出会う。そこには、地形と結びついて形成された風早ならではの光景が広がっている。

芸藩通志から、江戸時代から河川や水路が多く、水の豊富な地域であることがわかる（図 11）。蛇道川と宇造川が合流しているところもあり、江戸時代にすでに特徴的な風景が広がっていたと推測される。河川沿いに道も通っており、人の往来を感じることができる。

蛇道川には、個人住宅専用の橋が架けられており、生活と密接に結びついた河川であることがわかる (①)。1898 年の地形図を見ると、農地であることが読み取れ、

まだ住宅がない(図12)。1947年の空中写真から確認でき、この時には、河川と個人用の橋により、特徴ある風景が作り出されていた。蛇道川沿いには立派な屋敷も立地している(③)。1898年の地形図で主な道路沿いに立地する建物に該当し、おそらく、この時にはすでにこの景観が作り出されていたと推測される。敷地の側面に石が積まれており、護岸も同様の石積みだったと考えられる。現在はコンクリートで固められた味気ない護岸になっている。

蛇道川と宇造川の共通点として、自然地形が作り出した蛇行する河川に沿って建物が建てられ、特徴ある景観になっているところが多い(②, ④, ⑥, ⑧)。多くが1898年よりも後で1947年までに作り出された景観である。

宇造池の近くなど宇造川には農地と結びついた景観が形成されている。1898年の地形図からこの時には農地として利用されていたことがわかり、現在も農地であることから、100年以上も持続する景観なのかもしれない(⑤, ⑦)。風早らしい景観のひとつである。

浄福寺の正面の直線の道路は芸藩通志にも描かれている。この道路に沿って水路も流れ、直線の強い軸線をさらに強調している(⑩)。これは人工的に作り出された景観である。

このように水と結びついて形成された地域構造が風早の特徴と言える(図13)。



図11 河川と水路が作り出した特徴的な空間の位置
芸藩都志に上田健一朗、樋渡彩が追記

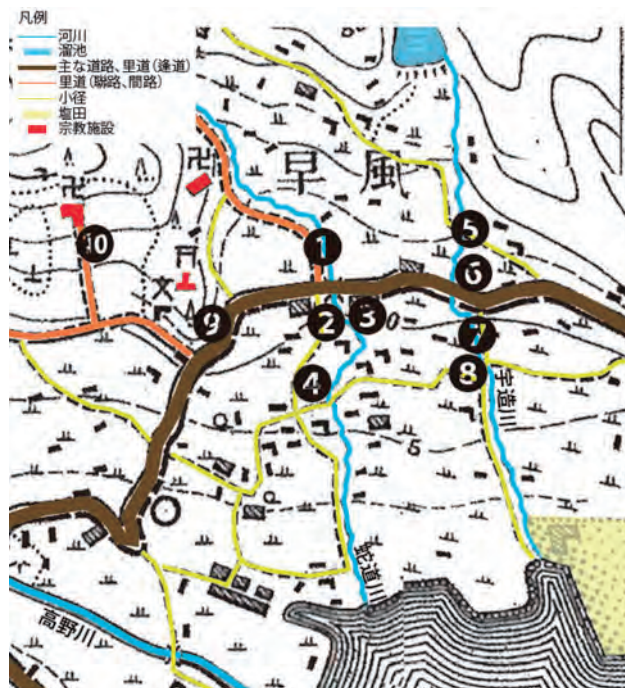


図12 河川と水路が作り出した特徴的な空間の位置
1898年地形図に上田健一朗、樋渡彩が追記



図13 風早における河川と水路が作り出す特徴的な空間

7. 木谷のFW

10月6日午前は、三津の東隣りである木谷を周った。木谷地域は、安芸津町の東に位置し、瀬戸内海に面した海岸と丘陵地帯が特徴的な地域である。

江戸時代から明治にかけて、木谷では入浜式の塩田が営まれており1930年の廃止まで続いた^{注9}。

また、丘陵地の赤土は煉瓦の原料として使われ、明治時代には木谷および周辺地域に煉瓦製造が盛んだった^{注10}。

¹⁰ 煉瓦は、酒造用の煙突などに用いられた。

FWでは、以前の主な産業だったレンガ造もところどころ見受けられた。

さらに、木谷は古くから廻船業の拠点でもあった。江戸時代には、地域の船主たちが瀬戸内海から日本海にかけて交易を行い、藩米の輸送や廻船による物資の流通を担った^{注11}。

農業では馬鈴薯や柑橘、野菜・花のハウス栽培が行われ、また沿岸部では漁業や牡蠣養殖も盛んであった。

10月6日午後は、Iターンで農業を営む甲斐農園を訪れた。ジャガイモ畑とレモン畑で具体的な栽培方法や赤崎の魅力についてうかがった。



図14 木谷の風景を作りだす畑と海と島
撮影：樋渡彩



図15 2025年10月6日 甲斐農園さんによるじゃがいも栽培のレクチャー 撮影：近原一樹

以上、3日間のFWを通して、都市（商業など）、海（漁業や製塩業など島を含む水域＋沿岸部）、陸（農業など内陸）と安芸津は豊かな地域構造（テリトリーオ）で形成されていることがわかった。

注

- 1) 東広島市安芸津町史編さん委員会、東広島市教育委員会編『安芸津町史』広島県東広島市、2011年、p.187。
- 2) 同前。
- 3) 東広島市教育委員会、https://www.city.higashihiroshima.lg.jp/material/files/group/86/4_higashihiroshima_bunkazai_concept_chapter4.pdf, p. 44（2026年1月15日閲覧）。
- 4) 東広島市安芸津町史編さん委員会、東広島市教育委員会編『安芸津町史』広島県東広島市、2011年、p. 298。
- 5) 原田欣二氏のヒアリング。
- 6) 東広島市教育委員会、<https://www.city.higashihiroshima.lg.jp/material/files/group/86/20211125miurasake.pdf>（2026年1月13日閲覧）。
- 7) 榊山八幡神社、宮司行友氏のヒアリング。
- 8) 東広島市安芸津町史編さん委員会、東広島市教育委員会編『安芸津町史』広島県東広島市、2011年、p.698。
- 9) 市史跡 二馬手塩田跡 樋の輪 - 東広島市、https://www.city.higashihiroshima.lg.jp/soshiki/kyoikuiinkaishogaigakushu/3/11/bunkazai/town/akitsu/37185.html?utm_source=chatgpt.com（2025年12月21日閲覧）。
- 10) 東広島デジタル、https://www.higashihiroshima-digital.com/special240729/?utm_source=chatgpt.com（2025年12月21日閲覧）。
- 11) 東広島地歴ウォーク 馬鈴薯畑と海岸を歩こうー 安芸津町木谷、<https://www.higashihiroshima-digital.com/special-240729/>（2025年12月21日閲覧）。

本稿は『COMMON プロジェクト安芸津沿岸地域の魅力向上と持続可能な管理 2025 年度成果報告書』（樋渡彩編著、近畿大学工学部建築学科、2026年）を編集し、『法政大学エコ地域デザイン研究センター2025 年度報告書』（2026年、pp.20-27）に掲載した論考をもとに、加筆修正したものである。

謝辞

本研究は、東広島市と近畿大学の共同研究である Town & Gown Office COMMON プロジェクト「安芸津沿岸地域の魅力向上と持続可能な管理」（代表：樋渡彩）による成果の一部である。この場を借りて感謝申し上げる。